



號四十三第

月七年五十和昭  
行發日一月十  
行發日五・回一月每  
錢五金部一價定誌本一  
錢拾六金(共稅)年  
助之幸川大 編發行發  
一ノ七西鹿區區橋京市京東  
社信通盟同 所行發

# 御言葉を謹承して

同盟通信社社長

古野伊之助

## 御言葉

各社カ今次事變勃發以來作戦ノ報道宣傳ニ緊密ニ協力セラレアルハ予ノ深ク満足スル所ニシテ茲ニ職員一同ノ勞苦ヲ多トスルト共ニ敵彈病魔ニ斃レル諸士ニ對シテハ深ク敬弔ノ意ヲ表ス  
惟フニ事變ノ前途ハ未タ必スシモ樂觀ヲ許サス而モ國際情勢ノ變轉逆路シ難ク舉國一致ヲ要スルヤ感々切ニシテ各社ノ使命益々重大ヲ加フ各社宜シク一層奮勵努力愈々作戦ニ緊密ニ協力セラレンコトヲ望ム

昭和十五年六月二十九日

參謀總長 載仁親王

## 減頁の意義

山口 巖

用紙制限は新聞に對して根本的改革的無言に而かも強力に一絶對命令的に臨んでゐる。商品主義として所謂自由を標榜し來つた新聞は今やこの運命的變革朝に當りその形式に、その表現に、智識を傾けてゐる。斯くして好むと好まざるに拘はらず朝夕八頁建を一段階として新しき形貌を示さんとしつゝある。即ち全國新聞は最小の紙幅を以て最大の効果を擧ぐべき最低標準を研究しつゝあるがこの苦惱は恐らく東亞新秩序に對

する歴史的記録となるであらう。七月から増強された用紙制限の結果として東日は月、木、土、日だけ朝刊六頁、夕刊四頁と二頁減頁し朝日は月曜日だけ二頁を又讀賣は月、木、土の三日間は朝夕各四頁に減じる事になつた。今回の制限は新聞としては正に致命的であるが、支那事變四年目に至つて漸くこの程度では歐洲の状況から見ると餘りにも悠長に過ぎる。試

みに彼等の状況を擧げると昨年九月英獨佛の開戦を待たず各國は既に減頁を斷行し資材擁護をやつてゐた事が判る。  
イギリス—昨年戦争開始以來用紙不足に悩み本年五月よりは戦前の二分の一以下となりロンドンタイムスの如きは大戰前々月に十八頁乃至二十四頁建と減頁したものをその後屢々減頁を行ひ現在は僅に八頁建に縮少、又、デーリー・メールは十六頁乃至二十頁建より八頁建に減頁した。然し購讀料はそのまゝ据置となつてゐる。  
ドイツ—フェルキツシエー・ベオバハター紙はナチ黨の中央機關紙で大戰二ヶ月前迄は日曜十六頁建、火、木曜は十頁建、他は平均十二頁建であつたが大戦勃發の前日より日曜を除き平均十頁建に

減頁し本年、三月以來は六頁建となつてゐる。  
フランス—タン紙は大戦勃發前々月の昨年七月まで土、木曜日は八頁建、日曜日六頁建、他は六頁乃至八頁建であつたが同八月より一ヶ月中四回の八頁建を除き悉く六頁建となし本年五月以降は木二頁建となつた。  
これ等の状況を見る時、日本は英獨佛三國が爲し來り爲しつゝある以上の大戦争を四ヶ年に互り敢行しつゝあるのみならず、更に滿洲を始め支那占據地域の建設工作をせよとあるに鑑みれば新聞が今日迄些したる用紙の制限も受けなかつたのは餘りに恵まれ過ぎたとも言へる。減頁は更に餘儀なく強化せねばなるまい。その結果として編輯整理上の根本的刷新廣告、紙價、經營等の再検討が必然的に要求される。

新聞の統制は用紙の側から最も苛烈に強行されつゝあつて、近くは石川縣に於て北國新聞と北陸毎日とが合併し、續いて隣縣富山縣に於て富山日報、北陸日日、北陸タイムス、高岡新聞四社の合併が進捗中と聞、斯くて一縣一紙が着々實現されつゝあるが、この一縣一紙は果して政府の根本方針に基くものか、又は偶然的一致なのか、それとも地方紙の必然的運命なのか、我々は此際地方紙の存在意義について再検討の必要を覺えるものである。用紙の側から見たる全新聞用紙中の約七割迄は東朝、東日、大朝、大毎、讀賣の五社で占めその殘餘の約三割が全國地方紙で消費されると云ふ。然し國民全人口と全地域から見ると中央五社の讀者は一部であつて地方紙の占める領域と人口とは正に用紙の逆である。強いてその割

合を求めらるなら九對一と云ふ所であらう。地方長官の中には中央紙さへあれば地方紙の必要なことの妄言を吐いた者があると云ふが斯くの如き地方長官を戴かねばならなくなつた地方と地方民に對しては同情と憤懣を禁じ得ない。私は斯る地方長官に對し何のため地方廳を詰問し度い。  
地方紙は正に行政區劃と離れ難き相關性を有するものである。一國一黨を實現し新しき政治體制を整へた場合に於ても新聞の絕對數は行政區劃と一致すべきを理想と考へる。即ち行政區劃か一地區の特殊性を意味し、これを綜轄する限りに於て當該地區に適存すべき新聞を必要とする。但しそれは充實したる一紙を以て十分とする。斯くの如き見地から全國新聞界を見る時、政府に確乎たる方針を缺き地方に明確なる認識を有せざる事が痛感される。商品主義に依つて今日に至つた新聞を新しき時代に適應せしめるためには唯だ徒に用紙の側から或は漠然として一縣一紙と云ふが如き線から出發した形式的統制では意味をなさなない。行政區劃が廢合を要するに至つた今日としてはこれも同時に斷行して地區の整理も必要とする。  
新黨は出現するであらう。國民組織の再編成は強行されるであらう。その實現の日が目前に迫りつゝあるに新聞は一體どうしてゐるか、特に地方新聞は何を考へ何をなさんとしてゐるのか。中央五紙だけが新しき時代の求める新聞ではない。地方紙はその獨自の使命と交通、通信機關の發達とに鑑みて今から新しき指導標の下に再出發をなすべきではないか。  
明治初期の新聞が内外諸般の情

勢に對し常に社會の木鐸として輿論指導を重大使命としたるの結果は日本國民の新時代に對する覺醒及び新建設を助長促進したものであつて、世界驚異の明治時代現出に對しては甚大なる功績があつたその後大正に入り歐洲大戰の勃發とアメリカニズムの范濫は商品主義新聞としての發達を遂げ、單なるニュース報道主義に墮した。主義、主張なく、指導性を缺くの結果は社説の低下となり、自由の名の下に分裂と分化とを來した。征韓論に於て見る日清日露戦争に於て見る日本、亞細亞復興の理想とこれを敢行した日本の氣魄とは元より明治大帝を戴いた維新傑士の滅私奉公の至す所多大ではあつたが、同時に新聞人の烈火の如き報國の至誠であり憂國の熱情であつた。吾々は現代の新聞人が徒に先人に譲つて居るとは考へぬが嘗て我等の先人が血涙を以て獲得した自由が唯だ所謂自由の名に依つて、今日最も唾棄すべき安逸と無軌、ことに變化せしめられた事を認識し能はぬ迄に、骨の髄迄麻痺せしめられてゐる事を三省して見ねばならぬ。ヒットラーは「我が闘争」の中で新聞について左の如き見解を示してゐる。  
即ち新聞の讀者は次の三種に分類することが出来る。  
一、讀んだものを全部信ずる層  
二、如何なる報道にも最早や信をおき得ないと云ふ段階に達した層  
三、記事を批評的に検討しそれによつて自己の判断を下す層。勿論第一に屬する讀者が絶對多數である。これが大衆層である。彼等は與へられたすべてのものをそのまま信じて了ふ。新聞はこの大衆層に

(二面へ續く)



日支通信社懇親會

新國民政府の國策通信社、中央電訊社は去る五月一日を期して華々しく發足し、首都南京において...

中央社からは社長林柏生、副社長趙雲儒兩氏始め許總編輯、張尤兩副總編輯以下中堅幹部全員出席...

同盟の連中は育ちが育ちだから禮儀を辨へぬ點もありませう、しかし各人が社長のつもりで働いてゐる元氣者ばかりです。

同盟の社員諸君は日本の愛國青年ばかりだと思ひます。吾等中央社の同人も亦、中國の愛國青年なのであります。

互助會報告

(六月)

野田 京子(中南支總局) 結婚

川村 祐二(青森支局) 小杉純三郎(本社調査部) 濱田 浦吉(本社寫眞部) 德山 辰行(關門支社) 出生

佐々木健兒(北支總局)第五子 鶴澤 邦男(臺北支局)長女 岡本 耀廣(廣島支局)二男

泉 清一(關門支社)第三子 宗澤萬壽夫(神戸支局)長女 柴山善一郎(本社) 同

小山 憲治(大分支局)長男 村山 甚之介(廣島支局)同 伊牟田重雄(鹿兒島支局)二女

熊澤 俊彦(中南支總局)夫人病氣 石田 貞一(同) 片山 政春(大阪支社) 同

淺野重三郎(岡山支局) 同 渡邊喜世子(神戸支局) 同 德重 惠一(神戸支局) 同

光田 稔(關門支社) 同 齋藤多喜子(本社整理部) 同 湯川 潔巳(本社外經部) 同

米田 義昌(本社整理部) 同 神山 謙介(同) 松澤 賢二(本社地方部) 同

鬼頭 清(名古屋支社)戰病 山本 守(本社技術部)病氣 湯本與喜次(中南支總局)實母死亡

上野 茂(本社地方部)長女死亡 青木 幹一(本社社會部)死亡 古津 四郎(京城支局)實父死亡

岩野 昌彌(關門支社) 同 山本 壽樹(本社運動部)實父死亡 塚本貞之助(本社外經部)實父死亡

友田 壯一(本社運動部)祖母死亡 齋藤多喜子(本社整理部)死亡 木下 正敏(北支總局) 同

藤岡 達郎(福岡支社) 同 山本 啓式(下關支局) 同 入交 貞(本社商通部) 同

鈴木 孝省(同) 同 內山林之助(本社寫眞部) 同 吉川 尚寬(同) 同

菊地長五郎(本社寫眞部) 同 大塚 良一(同) 同 石川 泰三(本社社會部) 同

齋藤 直吉(本社整理部) 同 野村 俊雄(本社映畫部) 同 加藤 勝一(同) 同

同盟通信社

六月二十八日午前十一時から東京市丸の内東京會館に於て開催、左記事項を附議可決。

一、昭和十四年度收支決算に關する件。 二、第七回通常社員總會附議事項の件。

三、社長及常務理事他職兼務の件。 四、中央電訊社との通信契約締結の件。

五、財團法人同盟育成會設立に關する件。 六、通信停止社處置に關する件。

七、諸般の報告。 八、理事異動の件。 九、社員新聞社異動の件。

項附議決定した。 一、理事補缺選舉ノ件(九州日日新聞社長伊豆富人氏に決定)

二、報告事項 (イ) 昭和十四年度事業及決算報告ノ件 (ロ) 昭和十五年度豫算報告ノ件

(ハ) 其他諸般ノ報告 去月死去した社會部員故青木幹一君の母堂より互助會宛左の如き會葬禮狀を寄せられ、三七日の法要に當り金五拾圓を寄附された。

前略 青木幹一死去に際し御一同様遠路わざわざ御會葬被下向、又其節は多大なる香額料を賜り難有御禮申上候彼が在世中は一方ならず御援助と御指導を賜り萬々添けなく奉謝候本日三七日の法要を營むに當り別封金五十圓也を御會に御納申上度候に付何卒御笑納被下度先は右御挨拶まで

六月七日 母 井上初枝 姉 井上房江

同 盟 人 事 (六、一、一六、二三) 總務局長 福岡 誠一 大阪支社長 塚本 義隆

大阪支社長 塚本 義隆 總務局長 福岡 誠一 大阪支社長 塚本 義隆

總務局長 福岡 誠一 大阪支社長 塚本 義隆 總務局長 福岡 誠一

中南支總局業務部長ヲ命ス 村山 勤務社員

中南支總局英文部長ヲ命ス(六月一日附、各通) 秦泉寺清三

編輯局長 武田 尚昌 編輯局長 武田 尚昌

